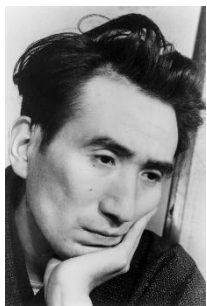


「絶対肯定の愛」(2020. 6. 21)

「神の痛み」も十字架の愛とともに、神の愛を否定している人間の罪を否定して注がれる愛、すなわち否定の否定としての絶対肯定の愛である。(北森嘉蔵『神の痛みの神学』より)

ユダヤ人にとって、神様から罪の赦しを受け、義とされるためには、その罪に相応しい生贄を捧げ、十戒を中心とした律法を一つ一つ従順に守り行うことが必要だった。でも、福音はそんなことを要求しない。キリストが全き生贄となり、すべての人の罪に対する神の真実の怒りを負われ、死に至るまで信仰の従順を貫かれた。律法の要求を完全に満たしてくださった。だから、自分で何か罪を償う必要はない。何か良いことをして神さまのご機嫌を伺う必要はない。ただ求められているのは、信仰。キリストがなされたこの御業に湛えられている「絶対肯定の愛」を信じ受け入れ、イエス様を主と告白し、信じ、崇める、それだけ。その信仰だけで神様は私たちの罪を赦し、義とされる。これが福音だ。



でも、よく考えると、私たち日本人もユダヤ人のように、何かをして償わなければ赦しを信じられない、気が済まない、という気真面目さがある。そのためになかなか福音を聞いて、それを受け入れるのには時間がかかる。『人間失格』を書いた太宰治の言葉に象徴されている。「赦されてなんか、いるものか。」という言葉である。「マタイ傳二十八章。読み終へるのに、三年かかった。マルコ、ルカ、ヨハネ、ああ、ヨハネ傳の翼を得るは、いつの日か。」それほど聖書を読んでいたのに、最後はこの言葉である。自分の罪の深さに圧倒され、十字架の贖いが曇ってしまったのだろう。もし太宰が、メル・ギブソンが監督した映画『パッション』を観ていたら、違った展開になったのでは、と思う。激しく打たれ、裂かれる体。飛び散る血潮。これ以上ないという苦しみを味わうキリスト。もし、そこに自分が受けるべき裁き、神の怒りを洞察していたら、「赦されてなんかいるものか」なんて言えない。むしろ、「すみません。イエス様、有難うございます。」そう告白するのではないか。



私たちはここに立ちたい。イエス様の十字架の苦しみによって償い得ない罪はない！イエス様の贖いの完全さのゆえに、もう下手に償うなんてことはいらぬ。神さまが求めていらっしゃるの、ただその贖いの業、そこに湛えられている絶対肯定の愛を信じ、そこに立つことです。その信仰だけで神様は喜ばれ、「よし！義（よし）！」とされるのだ。

私たちは、反面教師として太宰から福音を学ぶことができる、と言えよう。